

老年看護学の看護実践能力を高める教育のあり方

大 瀨 律 子

Abstract

Gerontological Nursing aims to increase elderly people's health to the point that they can remain healthy in their old age and live independent and comfortable lives that enable them to spend the last part of their lives feeling satisfied.

In order to cope with health care issues associated with the rapid aging of the population, aged care has developed into holistic care including a range of health care, medical care, and welfare services. The field of Gerontological Nursing covers a wide range of areas such as: homes for the elderly, communities, medical facilities, long-term care insurance facilities, and in-home-care assistance services. Nurses for aged care are expected to fulfill diverse roles and improve the quality of nursing care. Health care for elderly people comes in a wide range of forms from maintaining good health, to promoting longevity, and to providing End-of-Life Care. It is necessary to promote an overall care method which respects the independence of elderly people and encourages them to fully explore their abilities based on the assessment of their health condition, including their physical, mental, and social changes due to aging and environmental factors. It is also indispensable to care for the elderly person's family, to enhance the aged care system, and to promote aged care in communities. In order to cope with such diverse Gerontological Nursing, nurses are demanded to create a new paradigm of aged care, and expand the scope of their work as required. Keeping in mind the issues mentioned above, this study considered a paradigm of Gerontological Nursing focusing on the current practical training to help improve the quality of aged care.

It was found that practical trainees were able to learn about aged care in actual situations directly related to the work. In order to improve their practical skills, it was necessary to create educational methods to help them acquire solid aged care skills and strengthen ethics related to Gerontological Nursing. It was also necessary to educate them so that they could learn how to utilize skills from other fields, and to foster a clear view of aging and aged care in their minds.

Key words: Gerontological Nursing practical training, fostering a view of aging, health assessment, aged care skills, collaboration in aged care

I. はじめに

我が国における老年看護学教育は、平成元年に保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則に定められるカリキュラム改正が22年ぶりに行われ、高齢社会のニーズに対応する必要が強調され、老人看護学が創設された。しかし、その時点での実習は、成人・老人看護学実習であり、その後、平成8年に再度カリキュラムの大幅な改正が行われ、在宅看護論と精神看護学の柱が立てられると共に、老人看護学は、老年看護学という名称になり、老年看護学の実習単位が独立して立てられ、在宅看護との関わりも強化された。

また、平成21年から実施の指定規則改正の留意点によると、老年看護学では、特に、生活機能の観点からアセスメントし看護を展開する方法を学ぶことを強化することが求められている。

このように老年看護学は、日本における急速な高齢化の進展に合わせて、高齢者の健康上の課題に対応すべく、ケアシステムの改善及び、ケアの質の確保、ケア体制を強化する必要に迫られてきた背景がある。

その様な状況の中、老年看護に期待される役割と場の広がり、着実に増加しており、老年看護の場は、高齢者の住む家庭や地域、病院、介護保険施設、介護保険の在宅支援サービスの場など広範囲であり、それ

ぞれの場で看護職に期待される役割も機能も多様になってきている。

また、高齢者の健康支援の内容は、健康長寿への支援から終末期ケアまで幅広く、高齢者の主体性を尊重しながら、老化が及ぼす心身・社会的変化、環境要因を含めて総合的に健康状態をアセスメントして、ケアを進めていくことになる。また、高齢者を介護する家族へのケア、高齢者ケアシステムの充実、地域の介護力を向上させる働きかけも欠かせない。この様に、多様な場で繰り上げられる老年看護活動の状況により、看護職は、従来の医療機関を中心とする看護の役割だけでなく、高齢者に対する新しいアプローチを編み出し、必要に応じて、看護業務の適用範囲を拡大していくことも求められている。

その様な背景を踏まえて本稿では、老年看護学教育の実践能力を高める教育について、臨地実習に焦点を当てて、実習の実際とその課題について述べることにする。

II. 老年看護学実習に関する研究の概要

医学中央雑誌の文献検索（2003年～2008年）によると老年看護学実習に関連あるものが、70件程度あった。その概要をみると、次のような内容が実習による学習として注目されていることが分かる。

1. 実習による高齢者のイメージの変化に関するもの

高齢者との関わりによる高齢者イメージ¹⁾、高齢者イメージの縦断的検討²⁾、イメージに影響する要因、実習前後の老人に対する感情の変化と影響要因など、学習経過に合わせて、看護学生の持つ高齢者のイメージがどのように変化するか実習による学習効果に注目している文献が多い。

2. 高齢者とのコミュニケーション・学生と高齢者との関係性に関する内容

実習の場における高齢者とのコミュニケーション³⁾、認知症高齢者とのコミュニケーション⁴⁾など、高齢者への対人援助の基本となるコミュニケーションに関する内容と高齢者との相互関係場面における学生の考え・思いと表現の傾向⁵⁾、学生と受け持ち高齢者との関係形成⁶⁾、看護学生と受け持ち高齢者の相互作用のプロセス⁷⁾についての内容がある。実習の場において高齢者とのコミュニケーションの難しさを感じながらも、世代を越えての人間理解の場となり、個別の高齢者の健康状態に合わせた種々のコミュニケーションを通して、人と人との関係性を築くことに繋がっている。

3. 高齢者の理解に関する内容

健康高齢者とのふれあい体験からの学び⁸⁾、実習における高齢者の理解⁹⁾、ケアプラン展開による高齢者の理解¹⁰⁾など、実習によって高齢者の理解が総合的にできる場となっている。また、看護学生の老いの概念の形成¹¹⁾、老年観の育成、高齢者施設の実習を通して得られた高齢者観など、実習を通して高齢者をどのように理解し、捉えているかに注目している。

4. 高齢者への倫理的配慮に関する内容

高齢者のプライバシー¹²⁾、高齢者の意志決定¹³⁾、実習における倫理的課題に関する学習内容、高齢者の身体抑制に対する意識調査¹⁴⁾など高齢者への倫理的配慮に注目している。また、安全への配慮に関する内容として、臨地実習における転倒経験と転倒認識、学生のヒヤリハットの内容と教育方法¹⁵⁾、実習中の転倒事故を予防するための取り組み、高齢者施設におけるインシデントの特徴、高齢者の安全に対する学生の判断の現状（歩行動作、食事動作）¹⁶⁾など、高齢者の安全への対応に関する内容があり、高齢者の事故予防への実践に繋がる課題を明らかにして、対処方法へと導く内容となっている。

5. 認知症高齢者に関する内容

認知症高齢者のイメージの特性¹⁷⁾、認知症高齢者のコミュニケーション、実習における認知症高齢者の理解のプロセス、認知症高齢者との関わりによる受容感情¹⁸⁾、アクティビティケアと認知症高齢者の生きる意欲、認知症高齢者の生活活性化、認知症高齢者と歌うことによる学生の学び、認知症高齢者の身だしなみへの援助、認知症高齢者の看護における学生の困難感¹⁹⁾など、実習において認知症のケアに関わる人が多いことの反映が伺えると共に、ケアの実践を通して、認知症高齢者の理解をすすめる、積極的なケアの工夫へと繋がっていることがわかる内容となっている。

6. 実習における高齢者ケアの実践に関する内容

高齢者の自立へのケア、高齢者の自発性を高めるアプローチ²⁰⁾、高齢者の持てる力の活用²¹⁾、実習の場で実施したレクレーションからの学び、実習で学生が困ったと思っている内容（移乗介助、清潔援助、活動への援助、排泄への援助、飲食への援助）、老年看護学実習での学生の看護ジレンマなどの内容がある。高齢者ケアの実践を通して個別の健康状態に合わせた日常生活援助の難しさが具体的にわかり、高齢者の心身の機能及び環境要因との関連をアセスメントした上で、個別の日常生活援助の方法を工夫する視点へと導くこと

に繋がる内容がある。

7. 老年看護実習における学生の学びに関する内容

通所サービス実習における学び、訪問看護実習での学び、訪問看護実習において学生が捉えた家族、老人保健施設における実習の学びと評価、老年看護学において学生が身につけた実践知としての看護援助能力²²⁾などがあり、様々な健康状態にある高齢者の老年看護実習の場からの学びについての内容が挙げられている。

8. 老年看護の実習方法・実習指導に関する内容

複数受け持ち方式の導入²³⁾、夜間実習での学習経験²⁴⁾、看護学生が老年観・看護実践能力を育むための実習指導²⁵⁾、学生の実習達成感に影響する要因、実習における自己評価項目の開発²⁶⁾、実習目標達成度評価と実習満足度との関連、学生の自己効力感と実習目標達成度との関連²⁷⁾、実習における看護技術の習得状況と自己評価との関連²⁸⁾などがある。注目されるのは、複数受け持ち方式・夜間実習の導入など、新カリキュラムにおける看護の統合と実践に求められるような実習を取り入れていることである。他に学生の実習における看護技術の習得・実習目標達成の自己評価など、実習指導と実習評価に関連した内容が挙げられている。

また、教育方法に関する内容には、カンファレンスのあり方、実習後の事例検討、学生チームにおける看護の継続を取り入れた実習の学び、高齢者のプラスイメージを形成する老年看護学実習の検討²⁹⁾、実習における学生のやる気を高める条件³⁰⁾、臨地実習における現地参加型看護技術教育の試み、臨地実習の教育評価など、教育方法の工夫によって、老年看護での学びを強化する対応が紹介されている。

III. 老年看護教育の実践

1. 老年看護教育で目指すもの

高齢者の看護で目指すものは、あらゆる高齢者が生の完成を目指して人生の最終段階にある老年期を健やかで、自立した、快適な生活を送れるように健康への支援をすることである。老年期を生きる人々は、個々の人生を通してこれまでに発達させてきたそれぞれの生きる力や老化に伴う変化への適応によって、自らの生活を豊かで個性的に変えていく可能性を持っている存在である。老年看護の実践では、長い生活歴をもつ高齢者の個別の心身・社会・環境要因に合わせて、対象にとってより良好な健康の状態、すなわち、それぞれのより健やかさ (well-being) を創出していくこと

が求められる。高齢者の持てる能力を最大限に生かして、できるだけ高いレベルの健康状態で過ごすことができるように高齢者個人の生き方に働きかける活動であると言える。老年看護学教育を進めていく上での核となるのが、対象である高齢者の理解であり、学生の老年観・老年看護観を幅広い視点で育成していくことが重要な課題である。

また、老年看護の質を高めるためには、科学的な根拠に基づいた効果的な実践内容が必要とされている。そのためには、高齢者の健康状態のアセスメントが的確にできること、複雑な健康問題をもつ高齢者と家族への専門的判断に基づく看護実践の提供ができ、相談活動、保健医療福祉関連職種との連携・調整、高齢者の保健医療福祉に関する施策への参画、看護の質を高めるための実践的研究が求められる。

IV. 老年看護学実習 I の実際

本学においては3年次後期の領域別実習の位置づけで介護老人保健施設で療養する高齢者を受け持ち、2週間の実習をしており、2週目の1日は、高齢者の在宅支援サービスの一つを体験するために、通所リハビリテーション (デイケア) での実習をしている。

1. 老年看護学実習 I の目的

- 1) 老年期にある対象の全人的理解と老年期に関わる保健・医療・福祉の実際を理解し、対象の生活の質を考慮した個別の健康援助ができる。
- 2) 保健・医療・福祉チームの連携の実際及びその中での看護の役割について理解する。

2. 老年看護学実習 I の目標

- 1) 老化の進行や健康上の課題を持ちながら生活している対象を全人的に把握できる。
- 2) 高齢者の生活場面から健康援助の必要性がわかり看護の目標を明確にできる。
- 3) 高齢者の実生活から健康援助の方法を立案し、実施できる。
- 4) 高齢者の生活場面で、実施した看護について評価できる。
- 5) 在宅高齢者の通所サービスの活動に参加し、高齢者の在宅支援の方法とその効果を理解する。
- 6) 高齢者ケアの場における保健・医療・福祉職員との連携や協力の必要性を理解する。

3. 老年看護学実習 I の指導において留意していること

- 1) 高齢者の健康状態を総合的にアセスメントできる

能力を養う

- 2) 高齢者の健康支援について、高齢者の主体性を重視した、個々の健康状態に合わせた自立への支援ができる。
- 3) 高齢者のケア場面における倫理的配慮が適切にできる。
- 4) 高齢者ケアにおけるチームケアと職種間の連携ができる。

高齢者と直に接し、ケアを通して総合的に高齢者の理解を進め、高齢者の健康維持・増進への積極的な関わりについて実感することで高齢者ケア観を育てていく機会とする。

これらの様々な学習を、学生の個々の興味・関心、実習への意欲を把握した上で進めていき、いかに効果的に学べるように関わられるかが、この実習指導に当たる教員の力量にかかっている。

4. 学生の学び

平成18年度に実施した実習での学びについて、学生の了承を得て概要を紹介する。

1) 実習の自己評価

実習目標に合わせた、学生の自己評価によると、「良くて」「まあできた」を合わせてほとんどの学生ができたとして評価している項目としては、1) 疾患および現在の健康状態、機能障害、残存機能、日常生活動作の状態が把握できる 6) 日常生活の自立を妨げている心身の状態、環境要因がわかる 7) コミュニケーション上の問題およびニーズがわかる 8) 健康上の問題および健康維持の目標がわかる 10) 常に対象の人格を尊重し、その人らしく主体的に生活できるように援助できる 20) 高齢者のケアに関わる保健・医療・福祉のチームメンバーの機能と役割を知り、そこでの看護職の機能を認識できると共に他職種との連携の必要性が理解できる 22) いかなる場面においても、高齢者の人権と人間性を尊重した態度をとることができるが挙げられる。これらのことから、学生は、高齢者の健康状態を把握するために、現在持っている慢性疾患、それに伴う服薬、老化および疾患の影響による生活面での機能障害を個別に把握し、健康状態をアセスメントする視点が得られたと考える。また、高齢者のケアにおけるコミュニケーションについて、高齢者個々のコミュニケーション機能を把握し、対象にとって最も適切なコミュニケーション方法を工夫し、対象と心を通わせるコミュニケーションについて評価している。また、老人保健施設で療養する高齢者の健康上の課題が何であるのかを把握し、毎日の生活の過ごし方と、廃用症候群を進ませる要因を把握し、どのように健康

を維持していくのかについて、疾患の悪化予防・感染予防・事故予防も含めて目標を設定する視点をもつことができていると考える。そして、いかなる場面においても、高齢者の人権を尊重し、自尊感情を傷つけない対応の必要性について理解できていると考えられた。さらに、老人保健施設での実習の特徴として、高齢者のケアに関わる保健・医療・福祉チームメンバーの機能を身近に理解できる機会が得られ、そこでの看護職の機能について、実感していることが分かる。

2) 老年看護学実習で学んだこと

学生の「老年看護学実習で学んだこと」の最終レポートの内容についてみると次のような学びを実感していると捉えられる。

① 高齢者の理解に関すること

- ・深い全人的理解が必要であり、人生の集大成の時期であるという認識がもてた。
- ・高齢者は、長い人生を生きてきた自信を持ち、生活の知恵者として困難な問題を解決しながら社会生活を送ってきたという自負もある
- ・受け持ち高齢者と接する中で、自分の目で見て、聞いて触れることで、その方の現在の状態や気持ちを理解していくことがとても重要である。
- ・高齢者と一括りにせず、経験豊かな人生の先輩として、過去から現在に至るまでの生活環境も含めて一人一人を理解することが大切だと感じた
- ・高齢者の方々はそれぞれが長い人生を歩まれてきて、人によって本当に価値観や生活観、人生観が異なるため、個別性の重要性を改めて感じた。
- ・高齢者の方と関わってみて全体的には本当に一人一人特徴が異なり、疾患や性格、今までの生活歴、老化などが複雑に重なりあい、同じ疾患であってもそれぞれの状態が全然違うことが関わっていくなかでよく分かった。声のかけ方一つにしても声のトーンだったり、大きさ、速さだったり調節して接していかなければ、その方を傷つけてしまうことを感じた。

② 高齢者の健康状態のアセスメントについて

- ・老年看護学実習では生活面から対象の心身の機能を捉えて、多方面から対象の健康状態を把握する必要がある。
- ・見た目だけではわからない、潜在する問題を見つけることが難しかった。表面的なものだけでその人の健康状態を判断するのではなく、様々な視点からその人を理解し、アセスメントし、ケアを行っていくことが大切だと学んだ。
- ・一人で多くの疾患を持っており、その疾患の悪化予防のケアは必要であるが、老化に伴う生理機能の低

下を反映したアセスメント、対象の個人差、対象の大切にしている思いをくみ取ることが大切である。

- ・老化が心身に及ぼす影響は大きく、老化もあるが疾患による影響を無視できない状態である。現在の身体状態、心理・社会的状況に関連する食事、排泄、清潔行動など日常生活動作をアセスメントするため、病態を理解しておくことは、基本である。

③高齢者とのコミュニケーションについて

- ・声かけ一つにしても個別性を重視した関わりが必要であり、高齢者と話す時には、相手のペースにあわせることが大切である。
- ・相手に伝えようと思う気持ちが大切で、同じことを繰り返し話しても何度でも聞き、高齢者に対する敬意の心を持って関わり、常に個人として尊重した対応をする。受容的・共感的な態度で接し、理解の状態を確認しながら、話を進める。高齢者が日常的に使用している分かりやすい言葉、表現を使用することで、円滑なコミュニケーションとなり、良好な関係を築ける。
- ・どんな方なのかできるだけ知ろうという気持ち、その人の気持ちや考えを大事にしようという思いで接した。
- ・利用者さんの個性に合わせたコミュニケーションの工夫をすること、様々な高齢者のその方の理解力にあった言葉掛けをすること、その人の立場や思いに共感し、尊重する態度で本気で接すること、非言語的なコミュニケーションがとても重要であることなど、コミュニケーションの面では特に気を配ることが多かった。
- ・コミュニケーションをとりにくい状態の人も、外に散歩に行ったときには、自分から話してくれた体験から、環境や対象者への配慮をすれば楽しく話ができるようになることが分かった。
- ・言葉では表現することができなくても、笑う、顔をしかめるなどの表情や、頷く、嫌な時は体に力が入るなどの行動でしっかりと何かを伝えようとしており、その思いを敏感に感じ取るには、非言語的コミュニケーションを活用することがとても大切であることに気づかされた。

④高齢者の健康支援に関する視点

- ・高齢者が自分にできる能力があることを感じたり、経験することが自尊心を向上させる結果へと繋がっていくのではないかと、利用者のできることを生かしたケアを提供していくことの大切さが実感できた。
- ・高齢者は、症状が出にくいという特徴をよく理解し、利用者の観察と一人一人の心身の状態をよく理解しておくことが重要であること、抵抗力の落ちている

利用者にとって早期発見と早期対処が重要である。

- ・常に日常生活場面で感染予防を意識する必要がある
- ・日常生活援助をすることは、その人の全身状態をいかにして良好に保っていくかを考えながらトータルにその人を観察し、分析し介助行為を実行していかなくてはいけない。対象者の生きていく過程において、利用者の全身状態を保っていくためのトータルケアの一部である。
- ・対象者のできないことを見つけるのではなく、今できていることを見つけ、これからもできていけるように援助すること、今の心身機能を維持する関わりが必要で。
- ・精神面でのアプローチがとても必要だと思った。意欲を引き出すことは簡単ではなく、その人の個性に合わせ、今まで生きてきた中でのこだわりを大切にしておいて関わっていく必要があるのだとわかった。
- ・利用者さんが今後の生活をよりよく過ごしやすいようにするためには、どのようなことが必要で、また本人が望んでいることは何かといったウェルネスの考え方が大切であると感じた。

⑤認知症高齢者のケアでの気づき

- ・利用者にとって繰り返す徘徊には意味があり、徘徊時の声かけ、目配りなどの対応でトラブルを防ぐことができることがわかった。
- ・日々の生き甲斐を見失い、居室で寝て過ごすことが多くなると、精神的に影響を及ぼし、周りの環境が症状の進行を早めてしまうことを実感した。
- ・自分でもこれだけ物忘れをしてしまうことは嫌であるし寂しいという思いを本人から聞いた。
- ・同じ会話をすることが何度もあり、毎日お話をしていくとその方の今までの生き方や価値観の一部を知ることができた。
- ・認知力は、低下していてもその人らしさは変わっていない。
- ・長い年月を生きてこられた方がそれまで得たものを、これからの生活で生かすことができるよう尊厳をもって生活するためのケアを行うことが、認知症高齢者に対する看護であることを強く実感した。
- ・認知症高齢者の行動を咎めず受け止め、その人のペースに合わせて接することや、事実誤認に対して訂正せず、自尊心を尊重して、その人が感じている世界をそのまま受け止めると否定されたという感情が残らず、よい関係が保たれることを知った。

⑥他職種との連携について

- ・朝のミーティングなどの場面では、介護職や看護職をはじめとする様々な職種のスタッフが情報を共有し、お互いに意見を交換している風景が印象的であ

る。他職種の連携を身近に感じることができた。

- ・介護職からみた視点と看護職からみた視点を共有してチームで利用者を支援していることが分かった。
- ・看護師は、病院の場以上に他職種と協力して、医療的側面から関わっていくことが求められると感じた。
- ・医師や看護師の他に、ケースワーカー、作業療法士、理学療法士、栄養士など様々な職員の方が情報交換などで連携し、利用者の方一人一人に合った援助を行っていた。

⑦看護職の機能・役割について

- ・看護師の主な役割として、利用者の健康状態の把握および管理やその時々に合わせて的確な医療への対処を行うことや、日常生活援助、リハビリテーション、在宅療養へ向けた支援をすること、予防的な健康問題への取り組みを行うこと、家族との連携を図り、家族への支援をすることがある。
- ・感染症に対する素早い対応、スタッフへの感染予防への周知と全員での取り組みによって感染予防を徹底していた。
- ・利用者の健康状態を把握し、何か問題が生じた場合や問題に繋がる恐れがある場合には迅速かつ正確に対応しなければならない。特にデイケアの場合では、看護師1名でその日の利用者の健康状態を管理し、リハビリや入浴の可否を判断しなければならない。その責任の重大性を感じると共に、老人保健施設での看護師に求められる経験や総合力の必要性を実感し、自分の看護に対する視野を広げる機会となった。
- ・老人保健施設では、看護師の判断で動かなければならないことが多く、知識も技術も判断力もいる。老人保健施設の看護師は総合的なアセスメント・判断をし、総合的なケアを提供するという点で、総合力が必要であることを知った。
- ・利用者に変化が起きた時や異常があった時には看護師一人で判断しなければならないときもあり、あらゆる疾患をいくつも持っている高齢者が多いので疾患や高齢者の特徴についての知識や技術も豊富でなければ務まらないのだと思った。
- ・疾患に対するケアを考えるのも看護ですが、生活を営んでいる人間を対象として、入院・入所しているときだけでなく、それ以前の生活や以後の生活のことも考えて看護することを学びました。
- ・看護の視点は、疾患、ADL、メンタル面、残存機能など様々な方向に向けていかなければならない。高齢者の多疾患や非定型的な症候に対する健康管理・観察・治療・急変への対応をしていかなければならないこと、感染予防、協力病院との連携を図ること、家族に対する連絡や情報交換という連携調整を図る

こと、時には、ターミナルケアに関わるなど幅広く、専門性が問われるものであると学んだ。

実習の全体的な感想として

- ・看護の幅広さと対象者の把握・理解の大事さを改めて実感することができ、その人の生活の場と関連したケア、その個人の能力を維持していくことの必要性を感じたと同時に難しさも感じることができた。人間は本当に個別であり、それぞれの生活をおくり、考え・思いを持って生きていく過程に関わっていくことのできる看護の重大さをなんとなく感じることも多かった実習であった。

以上のように実習による学生の幅広い学びの内容があげられた。

V. 老年看護の実践能力を高める教育について

老年看護学の看護実践能力を高める教育について、実習に焦点を合わせて研究の動向、実践している教育の現状を述べた。老年看護の実践能力を高める教育の目指すものは、あらゆる健康状態にある高齢者が生の完成を目指して、老年期を健やかで、自立した、快適な生活を送れるように健康面からの支援が的確にできることである。そのため、学生が実習において自ら学びを確かなものとしてできるような教育環境を整える必要がある。学生の学びには、高齢者の全人的理解、高齢者の総合的なヘルスアセスメント、高齢者への積極的な健康支援、高齢者とのコミュニケーション、高齢者の個性に合わせたケアプラン、高齢者の主体性を尊重した自立への支援、ケアを提供する確かな看護技術、高齢者ケアにおける倫理的配慮、ケアの要となる老年観・老年看護観を育成することが必要である。そのためには、老年看護教育に関わる教員の確かな老年看護観と学生が実習の場で、いきいきと学べる教育環境をどのように整えるか、また学生が高齢者の看護を積極的に捉えられるように指導する力量が問われる。学生が高齢者から、ケアを通して直に学べる実習の機会を最大限に活用できるように教育上の様々な工夫が必要である。

文 献

- 1) 近藤ふさえ他：看護学生の高齢者とのかかわり体験と高齢者イメージとの関連性、日本医学看護学教育学会誌、13：18-25 (2004)
- 2) 浅井さおり：老人看護学実習過程における学生の高齢者イメージ変化の縦断的検討、日本看護学教育学会誌、16 (1)：53-61 (2006)

- 3) 榎本朋子他：老年看護学実習での高齢者とのコミュニケーションにおける教育課題，川崎医療短期大学紀要，27：19－24（2007）
- 4) 佐伯香織他：看護学生の認知症高齢者とのコミュニケーション技法 老年看護学実習におけるプロセスレコードの分析，中国四国地区国立病院附属看護学校紀要，3：58－62（2007）
- 5) 安木清美他：相互関係場面における学生の考え・思いと表現の傾向 臨床実習指導者の関わり場面，日本看護学会論文集：看護管理 32：294－296（2002）
- 6) 鳴海喜代子他：看護学生の受け持ち患者との関係形成について 老人看護学実習における特徴，看護展望，27（9）：1048－1054（2002）
- 7) 西村由紀子：臨床実習における看護学生と受け持ち高齢者の相互作用のプロセス 修正版グランデッドセオリーによる面接データの分析，日本看護学教育学会誌，15（3）：37－48（2006）
- 8) 古村三津代他：健康な高齢者とのふれ合いを通しての実習の学び 実習記録の分析から，老年看護学，8（1）：78－85（2003）
- 9) 宮地真澄他：老年看護学実習における学生の高齢者理解ケーススタディの内容分析から，藍野学院紀要，43－49，（2006）
- 10) 増尾由紀子他：高齢者ケアプラン展開をとおして学生が高齢者をどのように感じたか，帝京平成看護短期大学紀要，17：31－36（2007）
- 11) 村上正：老いの概念の形成に関する考察 昔語り分析を試みて，京都中央看護専門学校紀要，10：49－56（2003）
- 12) 谷田恵美子他：高齢者のプライバシー「自己領域」に対する意識 看護学生（未実習・既実習）と看護師の比較，岡山県看護教育研究会誌，31（1）：12－20（2007）
- 13) 上村美智留：介護老人保健施設臨地実習時の個人情報開示と高齢者の意志決定プロセスガイドラインモデルの作成，プライマリ・ケア，30（3）：278－282（2007）
- 14) 市場美織他：高齢者の身体抑制に対する看護学生の意識調査 日本語版身体抑制認識尺度を用いて，九州国立看護紀要，10（1）：3－7（2008）
- 15) 内田陽子他：老年看護学実習における学生のヒヤリハットの内容と教育方法，群馬保健学紀要，26：81－87（2006）
- 16) 久保葉子他：老年施設実習における高齢者の安全に対する学生の判断の現状 歩行動作と食行動における判断，日本看護学会論文集：看護教育，36：206－208（2005）
- 17) 木村誠子他：看護学生の老年看護学実習における認知症高齢者イメージの特性 一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較，高知大学学術研究報告，55：37－43（2007）
- 18) 田中敦子他：認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査，埼玉県立大学紀要，7：59－66（2006）
- 19) 島田美香他：学生が認知症高齢者と接するときに感じる困難感の内容とその対処行動，九州国立看護教育紀要，9（1）：8－14（2007）
- 20) 新木真理子他：「高齢者の自発性を高めるアプローチ」における学生の認識と学び 老年看護学実習の新たな教育方法を目指して，日本看護学教育学会誌，16（3）：69－77（2007）
- 21) 上西洋子：看護学生による慢性期老年患者「もてる力」の活用について，日本看護福祉学会誌，9（2）：25－32（2004）
- 22) 高木初子：老年看護学において学生が身につけた実践知としての看護援助能力 意識的な振り返りを通して，自治医科大学看護学紀要，1：55－67（2003）
- 23) 西尾ゆかり他：高齢者看護学実習における学生の複数患者受け持ち方式の検討，滋賀医科大学看護学ジャーナル，6（1）：34－37（2008）
- 24) 大谷真千子他：老年看護学実習における夜間実習での学習経験，千葉県立衛生短期大学紀要，26（2）：83－90（2008）
- 25) 藤野洋子：看護学生が老年観・看護実践能力を育むための実習指導を考える 老年看護学実習での体験調査から，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，28：152－159（2003）
- 26) 木立るり子：老年看護学実習における自己評価項目の開発に向けて（その2）教育的有用性の検討，弘前大学医学部保健学科紀要，6：11－22（2007）
- 27) 奥津文子他：効果的な臨地実習指導方法の検討（II）学生の自己効力感と実習目標達成度との関連からの一考察，京都大学医療技術短期大学紀要，23－32（2003）
- 28) 笠井恭子他：老年臨床看護学実習における看護技術の習得状況と自己評価との関連，老年看護学，10（1）：124－133（2005）
- 29) 大石和子他：高齢者のプラスイメージを形成する老年看護学実習の検討，日本看護学会論文集：看護教育，35：94－96（2005）
- 30) 内田陽子他：学生の老年看護学実習についての評価 学生のやる気を高める条件，群馬保健学紀要，25：93－103（2005）

要 旨

老年看護学で目指すものは、あらゆる高齢者が生の完成を目指して人生の最終段階にある老年期を健やかで、自立した、快適な生活を送れるように健康への支援をすることである。

老年看護の場は、急速な高齢化に伴う健康上の課題に対応すべく、保健・医療・福祉の総合ケアとして進展している。ケアの場は、高齢者の住む家庭や地域、病院などの医療施設、介護保険の施設、在宅支援サービスの間など広範囲であり、看護職に期待される機能も多様で、看護の質の向上が問われている。高齢者の健康支援の内容は、健康長寿への支援から終末期ケアまで幅広く、老化が及ぼす心身・社会的変化、環境要因を含めた健康状態のアセスメントを基に高齢者の主体性を尊重しながら、高齢者の持てる力を発揮できるようなケアを総合的に進めていくことになる。また、高齢者の介護を担う家族へのケア、高齢者ケアシステムの充実、地域の介護力を向上させる働きかけも欠かせない。多様な場で繰り広げられる老年看護活動において、看護職は、高齢者に対する新しいケアのあり方を編み出し、必要に応じて看護業務の適用範囲を拡大していくことが求められている。このような背景を踏まえて、老年看護の質を向上させるための老年看護教育のあり方について、現在実施している老年看護学実習に焦点を当てて考察した。

実習は、高齢者ケアの場から直に学ぶ場となり、高齢者の看護への理解が十分に得られる場となっていることが分かったが、実践力を向上させるためには、看護の機能と他職種の連携、確かな老年看護技術、高齢者ケアにおける倫理、実習を通しての老年観・老年看護観の育成を効果的に教育する方法を工夫する必要がある。

キーワード：老年看護学実習、老年観の育成、ヘルスアセスメント、老年看護技術、
ケアの連携